



児童文化研究センター設立三〇周年

今年度ももちまして、児童文化研究センターは設立から三〇年目を迎える運びとなりました。記念といたしまして、センターに縁の深い方々にご執筆いただきました。

センター長よりご挨拶

浅岡靖央

白百合女子大学児童文化研究センターは、本年(二〇二二年度)、めでたく設立三〇周年を迎えることができました。一九九二年の創立以来、今日までセンターを支え、かつ盛り上げてきてくださいました、歴代の所長・所員・助手・構成員のみなさまに、心より感謝申し上げます。

三〇年という年月は、俗に「一世代」とも言われています。ということは、センターは第一世代を終えて、これから第二世代に入っていくということになります。第一世代においては、三文庫(金平文庫・富田文庫・光吉文庫)の整備、センター構成員による研究促進を目指すプロジェクト制度の実施、さらに恒例の講演会など、めざましい成果が積み重ねられてきました。それらを引き継ぎながら、第二世代では、さらなる飛躍をめざしたいと考えます。

そして、そのために必要なことは、構成員のみならず、これまで以上の積極的なかわりだと思えます。たとえば、「こんなプロジェクトがあればいいのに」と思われている方はいらっしやいませんか。その場合は、是非センターに相談してみてください。実現に向けて、最大限前向きに検討させていただきます。

二〇二二年六月現在、児童文化研究センターの構成員は総勢七〇人。みなさま、センター第二世代の発展に、よりいっそうのお力添えをどうかよろしくお願いたします。

〔本学教授・所長〕

センター報創刊の頃

小澤俊夫

一九九四年、白百合女子大学に私が奉職したころ、児童文化研究センターは、まだできたばかりだった。だんだんに研究グループが生まれて、いくつかの研究会が開かれるようになった。そういう研究会の成果を、センターの成果としてまとめて発表することが必要だという意見が、センターの中川助手を中心にして自然に生まれてきた。そこで、大学の事務局に相談に行ったら、マスールがすぐ理解してくれて、予算をくれた。そして研究センター報が生まれたのだ。

研究会はいろいろ生まれた。国文科の教員も参加して、多彩な研究会になった。教員が学科の壁にとらわれずに研究に参加するのを見て、わたしは自由な大学だと思った。

その頃生まれた研究会は、その後もそれぞれ発展しているようで、喜ばしいことである。

私は、学科の卒論指導と大学院の修論指導に力を

入れた。昔話という狭い分野だったけれど、ずいぶんたくさんの方が、昔話に関する研究をして、卒論や修論としてまとめた。学部の卒論と大学院の修論としては、どこに出しても恥ずかしくない、いい論文がたくさん生まれた。あの人たちは、卒業後にも昔話に関する何をかしているのだろうか、というも思う。

社会に出れば、いろいろな仕事をしているだろうし、結婚して子育てを一生懸命している人もいるだろう。それはもちろん大事なことになるのだが、卒論や修論でやった昔話に関することも、なにか継続してやっているといいなと、思う。特に昔話は、子育てに必ず必要なことなので、何らかの形で生かしていればいいなと思う。ぼくは相変わらず昔話に関することをして、本を書いたり、昔ばなし大学なんていう勉強の機会も全国で作っている。どこかで接点が生まれるかもしれないと期待している。

そして、現在、在学中の学生と院生も、間宮先生の昔話論で昔話について学ぶことができるので、存分に学んでもらいたいと思っている。創作文学も大事だけれど、昔話は、子どもの世界に近いので、子育てに入っても、子どもに関する仕事についても、すぐに必要だし、使うことのできる分野だからである。

ぼくは、白百合を終えてから、昔ばなし大学というものを全国で勝手に作って、社会人に昔話の勉強の場を提供している。受講者はほとんど女性である。お母さん、保育士、図書館員、幼稚園、小学校の先生など。基礎コースから始めて、語りやすい昔話の文章を実際に作るための「昔話再話法」の授業もしている。今はコロナに妨げられて、出かけてい

くことはできないので、Zoomで授業をしているが、みんな実に熱心に勉強をしている。日本の女性たちの勉強欲は素晴らしいと、いつも感嘆している。

この文章を読む百合の卒業生で、もしそういう勉強に興味がある人がいたら、参加してみてください。全国に勉強会があるから、どこかで参加できるだろうと思います。(連絡は、mukaken@ozawa-folkale.com)

〔本学元教授・元所長・客員所員〕

センターメタボに注意して 児童文化学 課程開設へすめ

宮澤賢治

一九九二年、百合で初めての大学院、発達心理学、児童文学の修士課程が設置されました。しかし懸念の児童文化学の修士課程は日本では類を見ないということで、院が出来るまで、という約束で大学に準備室のような形で事務室を作ったというのが児童文化研究センターの始まりです。その時は皆、児童学のすそ野の学問を盛り立てようとの熱意で盛りあげていました。初等教育系、文学系、心理系の先生方も皆、仲良く楽しい忙しさが満ちていました。特に英米系文学の勉強会が多かったので、英米系の研究者も多く生まれました。日文系の学者が育ってきたのは、したがって二〇〇〇年を越えたころでしょうか。

今、小生の手元にはセンター報がいくつか残っています。No.5(一九九二年十二月号)は、紙面六段組み六ページ、内容は院の教員や院生の論文や研究報告といった刺激的なものでした。小生も「ボランの広場は何処に

あるのか」という小文を書いています。桑原三郎さんが所長だったころです。四年後のNo.21(一九九六年四月号)からは紙面は三段組み、センター長 小澤俊夫さんの挨拶の中で年一回の論文集の刊行について述べられています。次の年、査読のついた権威ある論文集の刊行が始まったのです。

さらに四年後、No.27(二〇〇〇年三月号)で八ページ、三段、表紙は日本語目次と裏表紙英語版目次、研究論文集も四号まで発行され、四本の論文と巖谷小波の翻刻と注釈さらに研究会のおしらせ、五つの研究プロジェクト紹介、宮田登さんの追悼記事、等目を引きます。HP開設、故富田博之さんの蔵書の購入、故光吉夏弥さん蔵書の寄贈、故金平聖之助さんの蔵書寄贈の記事もありました。これらは皆センターの最も重要な貴重図書でした。

No.32(二〇〇五年七月号)に宮澤が所長とあります。学部で教職課程が出来たために藏西東黄さん(美術)もセンター員になられ、その記事もあります。プロジェクトも七つに増えています。センター叢書も九冊におよびます。二〇〇七年六月(N.34)、所長は石井直人さん、イタリヤから留学され、本大学院を出られ、博士の学位を取られたマリア・エレナ・ティシさんの記事もみられます。No.38(二〇一一年七月号)では、光吉文庫の科研費交付決定、富田文庫の整備完了の記事、鈴木重三さん逝去の記事など。

次々と発展してきたセンターの栄えある姿が浮かびます。そして今に至っています。何にしてもうれしいことです。これからはセンターメタボに注意して所員、研究員、助手さん一体となって明るい未来に羽ばたいて欲しいと思います。さらにセンターの門口を開いて、初期の目的、児童文化学課程の国への認知、そしてそれらを地

域に還元するすべ、も検討してほしいと思っています。公開講座開設なども面白いと思います。がんばれセンター!!!

〔本学名誉教授・元所長・客員所員〕

児童文化研究センター始まりの頃

中川理恵子

児童文化研究センターが三〇周年を迎えるに際して、創立当時の様子を皆さんにお伝えするという大役をいただき、当時を振り返ってみました。

私が研究助手としてお世話になったのはセンター設立二年目からの六年間です。プレハブ棟から引越してきた当時のセンターは、壁面に設置された本棚と応接セット、真ん中には、大きなテーブルとそれを囲むオレンジ色のイスがありました。

先生方や院生などがふらりと寄って、お茶を飲み、研究談義に花を咲かせているというのが、センターの日常でした。初代所長の桑原三郎先生は、イギリス留学のご経験からミルクティー文化を大切にされていました。次の所長の小澤俊夫先生も、コミュニケーションの場をとっても大切にされていました。このような雰囲気の中、センターで出会ったご縁を基に、名も無い小さな勉強会がよく行われていました。

センターのドアをノックして入ってこられる先生方の研究分野は、本当に多岐にわたっていました。紅茶をお出しして、少しくつろいでいただく。そうしているうちに、皆さんから興味深い、研究の卵のようなお話をうかがうことが出来るのでした。お茶を飲みながら構えないで語ってくださった雑然としたお話が私の財産になって

います。現在、私が大学で授業をする際のつかみに、この時代にかがったエピソードは欠かせません。

当時、日本に初めて児童文学専攻の大学院が設立され、それを契機として発足したのが児童文化研究センターでした。タコソボの学問から一歩進み出す。子どもを中心にした新しい視点、新しいアプローチで、従来の教育的視点から切り離れたところの児童文学研究、児童文化研究を目指す。周囲からは、その新しい研究の中心を担うべき、いや、担ってほしい、というような期待がありました。新しい何かが生み出される場というのは、雑然としたまだ輪郭の定まっていない思考やアイデアが交錯する場なのではないでしょうか。

私が研究助手をしていた頃の未発達のコМПЮターは今ほど簡単に仕事をさせてくれませんでした。何をやるにしても、今では考えられない時間と労力を要していました。それでも、児童文学・文化について一流の先生方と雑談できた日々は、とても刺激的な時間でした。

現在の貴重資料の管理を任されているセンターと、当時のセンターでは役割は異なるのかもしれませんが、コロナやウクライナ侵攻など変化する社会にあって、児童文化研究センターで様々な研究をされている方々と、ミルクティー文化的なコミュニケーションをかわし、新しい何かを生み出していけるようになったらなどと夢想しています。

〔本学非常勤講師・研究員〕

つながりをもたらす場

鈴木宏枝

白百合女子大学児童文化研究センターの設立三〇周年

に心よりお祝い申し上げます。一九九五年度に修士課程に入学して以来、センターにはずっとお世話になってまいりました。

特に思い出深いのはプロジェクトへの参加です。修士で初参加した「アメリカ児童文学研究プロジェクト」の『アメリカの少女たち―少女小説を読む』（アメリカ児童文学研究プロジェクト編、白百合女子大学児童文化研究センター、一九九九年）、歴史と児童文学の関わりを現代の視点で考えた「現代児童文学・文化〔英語圏〕研究プロジェクト」の『歴史との対話―十人の声』（神宮輝夫・早川敦子監修、近代文芸社、二〇〇二年）、アフリカン・アメリカンという自分のテーマに大きな示唆のあった「ふたつの世界プロジェクト」の『児童文学における（ふたつの世界）』（井辻朱美監修、ふたつの世界プロジェクト編、てらいんく、二〇〇四年）、学会でミニシンポジウムも企画した「Food for Thought―児童文学における〈食〉の意味プロジェクト」の『子どもの本と〈食〉物語の新しい食べ方』（川端有子・西村醇子編、玉川大学出版部、二〇〇七年）と、勉強会から出版までのプロセスをいくつも経験し、その楽しさを知りました。数年にわたる活動期間のあいだ、勉強会や講演会で定期的な知見を深めるとともに、メンバーとはプライベートでも親しくなりました。出産時にはお祝いをいただいたことも、ありがたい思い出です。

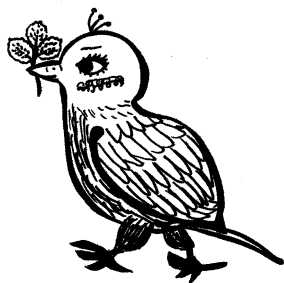
現在、私は神奈川大学外国語学部に勤めております。

二〇二〇年度に移籍するなりコロナによるキャンパス閉鎖とGW明けからの全面オンライン対応で、今に至るまでに、対面、ズーム、ハイブリッド、オンデマンドと、かなり経験値が上がりました。昨年は、みなとみらいへのキャンパス移転もあり、ようやく環境に慣れてきたばかりです。

いろいろ変化の多い中ではありますが、研究支援はかねて手厚いようで、着任してまもなく神奈川大学人文学研究所内の「（身体）とジェンダー」共同研究グループに誘われて他学部の先生方も親しくなったほか、今年度から「おとぎ話文化研究」グループを作りました。単発のシンポジウム運営も盛んです。コロナ禍の模索を経た自在なつながりの中にアイデアとヒントがあり、交流することでより豊かになれるというこの感覚は、センターのプロジェクトに参加していたときと同じものだと懐かしく感じます。

毎年、メーリングリストで「現在進行中のプロジェクト」を拝見するとわくわくします。若い研究者の皆さんにはぜひこうした機会を活用し、積極的に自分の考えていることを世に出し、議論に乗せてもらいたいのです。このような場を支えてくださるセンターの皆さまに感謝しますとともに、さらに次の一〇年、二〇年先に向けて、ますます発展されていきますよう、ご祈念申し上げます。

〔研究員〕



センター主催講演会報告

二〇二一年度は第六五回研究会を開催しました。ご参加くださった方々に心よりお礼申し上げます。

第六五回研究会

沼辺信一氏講演会

講演者 沼辺信一氏（絵本蒐集・研究者）
 題目 光吉文庫のロシア絵本について
 —コレクションの稀少性と歴史的意義—
 日時 二〇二二年三月二十六日（土） 十三時開催
 会場 白百合女子大学 三二〇三教室 / Zoomによる同時配信
 挨拶 浅岡靖央氏（本学教授）
 司会 酒井志麻氏（本学助教）

今回の講演会は、新型コロナウイルス感染症の拡大による延期を経て、二年越しの開催となりました。当日は直接会場にお集まりいただいたほか、Zoomによる同時配信を併用し、遠隔でもご参加いただきました。講演は換気のための休憩を挟みつつ、三部構成にて行われました。

第一部は光吉夏弥の紹介に始まり、沼辺氏のロシア絵

本との出会いと、ここ四〇年ほどのロシア絵本に対する評価の高まり、二〇〇〇年代に入ってから日本、ヨーロッパ、アメリカの各地で同時的に起きたロシア絵本の再評価の流れに言及しました。そして、光吉と同世代のロシア絵本コレクター、大阪の前衛芸術家である吉原治良、東京のグラフィックデザイナー原弘、前衛芸術家で漫画家、絵本作家でもあった柳瀬正夢（夏川八朗）、童画家の前島とも・松山文雄らの名前を挙げて、日本におけるロシア絵本の受容史の中に光吉を位置づけました。

第二部では戦中の光吉による絵本の翻訳の仕事に言及したあと、光吉文庫のロシア絵本が次々と紹介されました。『生活美術』一九四三年九月号に図版が掲載された絵本をもとに当時の光吉の海外絵本のコレクションの様態を推定、また、吉原ら同時代人のロシア絵本コレクターの旧蔵書を参照するなどして、現時点で分かる限りの入手経路について述べられました。さらに、上述の『生活美術』誌に光吉が寄稿した「絵本の世界」について、この論考の根拠の一つとなっていると考えられるアメリカの雑誌記事が紹介されました。

第三部では、「たぶん、こうだったんじゃないか」と、大胆な、しかし説得力のある推論が繰り広げられました。光吉が戦前から続けていた舞踊評論と、当時の日本人のバレエ・モダンダンスの鑑賞体験に写真メディアが果たした役割に触れ、光吉における絵本の編集方針（連続性・コンティニューイティの重視）の源について述べられました。

講演者の沼辺信一氏は、ご自身のコレクションの画像も交えて豊富な作品（絵本）や写真の図版を示しながら、およそ五時間にわたり、ロシア絵本と光吉夏弥について貴重なお話をしてくださいました。講演全体を通じて、まるでシャワーを浴びるようにロシア絵本の画像を

大量に見ることができ、とても贅沢な時間となりました。

三文庫のご利用につきまして

昨年度の講演会をきっかけに、三文庫を利用してもらうと思っただけの方もいらつしやることと存じます。現在、三文庫は感染症対策として制限を設けながら、利用を再開しております。

児童文化研究センターホームページをご確認の上、センターにて受付を済ませてご利用ください。三文庫のご利用にあたり、ご不明の点がございましたら、どうぞお気軽にお問い合わせください。

センター構成員活動紹介

過去から未来への橋渡しとして

安達 愛

近年、絵本や児童文学に関する展覧会が増えたと感じる方も多いのではないでしょうか。美術館や博物館で若い世代向けの企画が増えていく背景のひとつとして、SNSなどの普及により、子育て世代や若い人が博物館や美術館

の活動に興味を持ち、気軽に足を運ぶようになったことが挙げられると思います。

私は現在、博物館で学芸員の仕事をしています。が、普段どのような業務を行っているのかを少しだけご紹介したいと思います。

そもそも私が学芸員の仕事に興味を持つようになったのは、大学時代に、絵本やマンガの展覧会に足を運ぶようになったことがきっかけです。

文学やマンガの多くは読み終われば処分されるため、大衆に支持された作品でも、文学史に記録されないまま、存在が忘れられてしまうということが起こります。学芸員の重要な仕事は、散逸しがちな資料を収集し、保存・整理して、次の世代の人々に手渡していくことです。文学の歴史を後世に伝えていくために、私もそのような仕事に携わりたいと考えるようになりました。

そこで、修士課程在学中に、通信教育部がある大学の科目等履修生に登録し、学芸員の資格を取得しました。しかし学芸員の募集は少なく、特に文学分野の募集は減多に出ないため、最初の数年は公共図書館で司書の仕事をしながら、募集情報をチェックする日々でした。

そして、豊島区で非常勤の学芸員として勤務した後、埼玉県にて日本近現代文学分野の学芸員として採用していただきました。

私が埼玉県に入庁して最初に配属されたのは桶川市にあるさいたま文学館でした。文学館では、詩人・吉野弘さんの企画展を担当しました。最初の年は研修も多く、初めての展覧会で右も左も分からない中、夏のイベント準備などと並行して作業を進めるのは大変でしたが、多くの方に支えていただき、無事開催までこぎつけられた時はとてもほっとしました。

その後、大宮公園にある県立歴史と民俗の博物館に異

動し、教育普及の仕事を担当しています。博物館に来館する小学校団体を相手に火おこしを実演したり、土器の出前授業に行ったりと、今まで経験したことのない業務内容に、学芸員の仕事の幅広さを改めて感じました。

また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響は、博物館の運営にも大きく影響を及ぼしました。社会的に不要不急の外出自粛が呼びかけられる中で、当館も二度にわたる長期の臨時休館を余儀なくされました。開館後も他者との社会的距離（ソーシャルディスタンス）を取ることが求められる中で、多くのイベントが中止になりました。そのような状況下で新たに始めた取組として、動画の制作があります。大学卒業以来、久々に創作（シナリオの執筆）を行い、何本か動画を作りました。博物館の公式YouTubeで配信していますので、是非ご覧下さい。

博物館に限らず、社会の状況が大きく変化し、これまでの常識が通用しないことも多くなっています。しかしながら、自分に与えられた仕事を大切に、これからも過去から手渡された文学遺産を、未来へと橋渡しする役割を担っていきたくと思っています。

〔研究員〕

プロジェクト活動報告

児童文化研究センターでは、センター構成員による研究の促進を目指しプロジェクト制度を設けています。二〇二二年度は、次の四つのプロジェクトが活動しています。

プロジェクトへの参加を希望される方は、センターま

でお問い合わせください。

小波日記研究会（小波日記を読む）

〔研究代表 猪狩友一〕

巖谷小波日記（センター所蔵の複写資料）の翻刻・研究を継続しております。新型コロナウイルス流行の影響で、昨年も研究会を開けない状態が続きましたが、ようやく年末よりオンラインでの開催ができるようになりました。二〇二二年度も、オンラインで研究会を催し、引き続き国語国文学専攻の大学院生・修了生にもお手伝いいただきながら、明治三十九年〜四十年の日記を読み進めて参りたいと思います。翻刻・注釈も「児童文化研究センター研究論文集」に発表する予定です。

近現代児童詩歌研究

〔研究代表 宮澤賢治〕

本プロジェクトの活動成果をまとめた『児童詩歌』は、十七号となりました。第一号から続く「賢治と童謡」（十七）は、賢治に影響を与えたオペラの糸譜を辿りながら、作品と参照し賢治の思いをまとめています。「竹久夢二『小供の国』に関するノート」は、抒情詩や美人画で著名な夢二の子どもを詠った本詩画集の意義を問いつつ、夢二の描いた子ども像について考察しています。「中川ひろたかの『あそぶうた』研究」（六）は、『帰って来たわらべうた』の作品がどのように音楽と遊ぶことにつながっているのか検証すると共に、中川の活動拠点となったクレヨンハウス周辺にも言及しています。

今年度も研究会開催の時期や手段を検討、適宜対応しながら、近現代児童詩歌への、細く長い研究活動を各人続けていきたいと思えます。

紙芝居研究

(研究代表 浅岡靖史)

二〇二一年度は、四月二十六日に始まった緊急事態宣言が、二度の期間延長を経て六月二〇日にやっと解除され、ようやく七月二日に研究会の説明会を開催できました。幸いにも、博士前期課程の新入生が新たなメンバーに加わってくれ、その意味では幸先の良いスタートとなりました。とはいえ、すぐにまた七月一二日に四度目の緊急事態宣言となり、これが九月三〇日に解除されるまで活動できず、月例研究会の開催は、一〇・一一・一二月の計三回にとどまりました。それでも、各メンバーの奮闘により、『紙芝居研究』第五号は、二〇二二年三月に無事に刊行できました。今年度も地道に『紙芝居研究』第六号の発行をめざします。

ちりめん本研究

(研究代表 間宮史子)

二〇二一年度は、メンバーが個別に研究をすすめた他、メール等を活用して関連資料の紹介と検討をおこないました。また研究成果として一本の論文が発表されました。尾崎るみ「長谷川武次郎のちりめん本出版活動の展開——『欧文日本昔噺』シリーズが20冊に達するまで」(『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集

二五)です。三年間の研究を通して、ちりめん本に関するメンバーの興味関心はひろがりました。本年も、メンバー各自の研究から、ちりめん本研究に新たな側面が浮かび上がることを期待しています。



センターからのお知らせ

先生方のご著書

二〇二一年四月から二〇二二年五月までに刊行された、センター所員の先生方のご著書(訳書・編纂などを含む)を刊行順にご紹介いたします。

○デイヴィッド・プリングル、ティム・デイド・プロス編『最新ファンタジー百科…ビジュアル版…類型・映画・TV・人名・ゲーム・背景』井辻朱美監訳、柘風舎、二〇二一年九月

○浅岡靖史編・解題『「日本少国民文化協会」資料集大成』全八巻、金沢文圃閣、二〇二一年二月刊行開始

○『たけくらべ 現代語訳・樋口一葉』松浦理英子・藤沢周・井辻朱美・阿部和重訳、河出文庫、二〇二二年四月

一冊目の、井辻朱美先生が監訳を務められた『最新ファンタジー百科』は、二〇二二年の旧版を大幅に改定したもので、旧版とこちらの最新版の両方で、本学児童文学専攻OGの方々が訳者として参加されています。

浅岡靖史先生が編集・解題をされた資料集は、パンフレットにもご注目ください。収録されている関係年表はちよつと年代を確認したいときなどに便利です。パンフ

レットはセンターのキャビネットに収納してありますので、センターにお立ち寄りの際にはぜひご利用ください。

三冊目の、樋口一葉生誕一五〇年を記念して復刊された『たけくらべ 現代語訳・樋口一葉』では、井辻先生が「うもれ木」を訳されています。温かな黄色を基調とした可憐な表紙絵が目印です。

構成員研究発表会

児童文化研究センターでは二〇二一年度より主催研究会の一つとして「構成員研究発表会」を開催し、児童文学専攻の博士課程(後期)に在籍する三年生が中心となり、研究発表をしています。詳細は児童文化研究センターホームページなどでお知らせいたします。興味のある構成員の方は、是非ご参加ください。

センターブログと書評コンクール

センターブログ(<http://ido-bun.blogspot.com/>)は、当センターからの情報発信及びセンター構成員による自由な投稿の場です。児童文学・文化に関わる批評、研究ノート、エッセイ、創作、翻訳、新刊書・映画・展覧会・講演会の紹介や感想など、皆様からのご投稿を随時募集しております。投稿原稿は当センター宛てのメールに添付してお送りください。

また、二〇一九年度より、ブログ上で書評コンクールを開催しております。二〇二二年度の第五回書評コンクールは、四月末に募集を開始し、合せて五本の書評が寄せられました。書評コンクールのアーカイブはブログにて公開しておりますので、どうぞご覧ください。次回も開催時期が近づきましたらメルマガリストおよびブログにてお知らせいたしますので、是非ご参加ください。



センター構成員一覧

(二〇二二年七月現在・敬称略)

- 所長
浅岡靖央
- 運営委員
浅岡靖央 石井直人 井辻朱美
菊地浩平 間宮史子 水間千恵
森下みさ子 やたみほ
- 所員
浅岡靖央 猪狩友一 石井直人
井辻朱美 菊地浩平 間宮史子
水間千恵 森下みさ子 やたみほ
- 客員所員
小澤俊夫 白井澄子
松井千恵 宮澤賢治
- 助手
酒井志麻 宇佐美奈麻子
遠藤知恵子 若谷苑子
- 客員研究員
生駒幸子 西村醇子

- 委嘱研究員
木村八重子 竹田修
- 研究員
安達愛 石元みさと 伊藤かおり
尾崎るみ 金子真奈美

- 岸野あき恵 倉田恵理子
小林夏美 佐々木江利子
佐々木裕里子 沢崎友美
志村裕子 鈴木あゆみ 鈴木宏枝
鈴木律子 高原佳江 中川理恵子
永島憲江 浜名那奈 半田涼太
杉村裕子
- 宮崎麻子 八代華子 山越夢子
山本麻里耶 劉冠玫 和田啓子
- 準研究員
大橋珠美 黒川夏帆 立川真帆
奈良田和華 松尾紗代子
- 院生 (博士課程 (後期))
阿部泉 伊藤かの子
グラントウ、カトゥリーナ
孔阳新照 西村明恵 沼本知自
日暮英里佳 三井彩愛
- 院生 (博士課程 (前期))
勝又芽依 二宮加奈子
原田優香 深見けいと 雷瑠玉

編集後記

児童文化研究センター設立三〇年に発行される今号は、センター所長を務められた先生方と、児童文学専攻のOGの方々に寄稿いただきました。温かい励ましのお言葉の数々に感謝いたしますとともに、三〇年という歳月の重みを感じました。こうして記念の年を迎えることができますのは、センター構成員をはじめとする皆様のご支援のおかげです。

児童文化研究センターは、児童文学・児童文化研究者の皆様の研究・発表・交流の場として、事業の維持と益々の充実を図ってまいります。今後とも、変わらぬご指導とご厚誼を賜りますよう、お願い申し上げます。

(酒井・宇佐美・遠藤・若谷)

児童文化研究センター
夏期閉室予定日

～8月4日(木)	9:00～17:00 (平常開室)
8月5日(金)～9月22日(木)	閉室
9月23日(金)～	9:00～17:00 (平常開室)

上記の日程は変更することがございます。
ご了承くださいませ。

『白百合女子大学児童文化研究 センター研究論文集26』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。今年度も、以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集26』（二〇二三年三月発行予定）の原稿を募集いたします。

締切

二〇二二年九月二十八日（水）正午必着

提出物

- ① 表紙（論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載）
- ② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）
- ③ 論文要旨（300字以内、論文題目を併記）
- ④ 欧文要旨（採用決定後、100 words以内で提出。以上、①③について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。）

提出先

〒一八二一八五二五
東京都調布市緑ヶ丘一―二五
白百合女子大学 児童文化研究センター 宛

データの送付先

<cendo@shirayuri.ac.jp>

研究論文集担当 遠藤知恵子

審査規定

（センター規定より抜粋）

* 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。

* 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。
* 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

投稿規定

- 一 執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。
 - 二 児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。
- 【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が明確に述べられているもの。

【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。

三 投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。

四 表紙、本文、論文要旨、欧文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

※ 欧文要旨は、提出前に予めネイティブチェックを済ませておくこと。

五 本文のフォントサイズは10・5ポイント、用紙サイズはA4判、文字数と行数は40字×30行となるように設定する。縦書きの場合、用紙の向きは横とする。本文の枚数は20枚以内とする。

六 参考文献及び注は本文末に一括する。

七 ページ番号を本文の中央下に付す。
※ 書式の細部についてはMLA Handbook最新版及び過去の研究論文集を参照し、特に英語文献を引用する際はMLA Handbook最新版に準拠すること。

八 本誌に掲載された著作物の著作権は著者に帰属する。当該著作物は、「クリエイティブ・コモンズ

ズ表示-非営利-改変禁止4.0国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンス」及びその後継版のもと、白百合女子大学学術機関リポジトリで公開する。なお、執筆者がその他のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの選択を希望する場合は、原稿採用後に、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。執筆者が当該許諾に同意しない場合は、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。その意思表示のない場合は、同意したものと見なす。

審査結果発表

二〇二二年十月中旬

注意事項

- a. 完成原稿を投稿する。
- b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。
- c. 特殊記号、飾り文字、不必要なスペース等をなるべく使用しない。
- d. 図版を掲載する場合、引用要件を満たし、出所を明示する。
- e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術が必要とする場合は、実費自己負担となることもある。
- f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。
- g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会で審議される。
- h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。
- i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。